



Title	<Review>Irina NEVSKAYA and Marcel ERDAL (eds.), Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus.
Author(s)	齊藤, 茂雄
Citation	内陸アジア言語の研究. 2016, 31, p. 79-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/58625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

= 書評 =

Irina NEVSKAYA and Marcel ERDAL (eds.), *Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus* (*Studien zur Sprache, Geschichte und Kultur der Türkvolker*, Band 21). Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 2015.

齊藤 茂雄*

1. はじめに

内陸アジア地域の文字文化のうち、遊牧民の文字文化として最古に属しているのがトルコ・ルーン文字（突厥文字）を利用した古代トルコ語史料である。トルコ・ルーン文字は、北欧などで用いられたルーン文字に形状が似ているためこの名称で呼ばれてはいるものの、実際には各文字に割り当てられた音価に大きな隔たりがあるため、両者の関係性は不明のまま残されている。

トルコ・ルーン文字といえばモンゴル高原のオルホン碑文が思い浮かぶが、ほかにも南シベリアのイエニセイ碑文やセミレチエのタラス碑文など、各地で所在が確認されている。そのうちのひとつが本書の主題のひとつとなっているロシア連邦アルタイ共和国にあるアルタイ碑銘群である。アルタイ碑銘群は、その多くが岩壁に彫刻された簡素なもので、存在自体は 19 世紀から知られていたものの、調査は十分に行われてこなかった。21 世紀に入ってから本格的な調査が行われ、60 以上のルーン文字碑銘が発見された。さらに銘文が発見されることも期待されているものの、開発によって刻文された岩壁が既に破壊されてしまった銘文もあり、学術調査が急務となっていたのである。

そこで、独露が共同して 2007 年から 2009 年にかけて、アルタイ碑銘の収集と公開を目的とした国際調査を行い、2009 年春にドイツのフランクフルト大学トルコ学研究所とロシアのゴルノ・アルタイス国立大学の共同により、ゴルノ・アルタイスで国際シンポジウムが開催された。本稿はそのシンポジウムの予稿集である。なお、この共同調査では、アルタイ碑銘の研究推進と記録・保護を目的として、90 の碑銘について 2009 年にインターネット上にデータベースを作成し⁽¹⁾、2012 年にはカタログ [Тыбыкова et al. 2012] の公開を行うという大きな成果を残している。

このように、日本ではそれほど知られていない⁽²⁾アルタイ共和国のルーン文字碑銘ではある

* SAITO Shigeo. 日本学術振興会特別研究員 PD（早稲田大学，教育・総合科学学術院）

(1) “Памятники Рунического Письма Горного Алтая” (<http://www.altai.uni-frankfurt.de/>), ロシア語版と英語版があり、各碑文の GPS データと簡単な解説・試訳が掲載されている。

(2) 日本におけるアルタイ碑銘群の研究として、大澤 2015 を挙げておく。

が、現地では着々と研究環境の整備が進んでいる。そして、その研究の進展の結果提示されたのが本書なのである。それゆえ、本書はアルタイ碑銘についての最先端の研究書であるが、その一方で研究史の整理や、インターネット上のデータベースの紹介など、アルタイ碑銘に関する優れた入門書でもある。そればかりか、本書の扱う範囲はアルタイ碑銘だけに留まらず、近隣のイエニセイ碑文や敦煌文書、さらには遠く東欧のハンガリーまで、様々な地域のトルコ・ルーン文字史料に及んでいて、各地のルーン文字史料研究書にもなっている。

さて、前置きはこのあたりにして、以下に本書で扱う各論文の簡単な紹介を行う。その後、評者の関心に基づき、本書で議論されているオルホン・イエニセイ・アルタイ碑銘の時代考証に関する諸説を詳しく紹介する。

2. 内容紹介

論文① **Gleb V. Kubarev, “Vladimir Dmitrievič Kubarev: Biographical Sketch (14.08.1946–08.05.2011)”** 「Vladimir Dmitrievič Kubarev: 略伝」: ロシアの内陸アジア考古学者であり、シンポジウム直後の2011年5月に急逝したVladimir Kubarev 氏の研究と主要な業績について、その子息である著者が紹介する。本稿のみシンポジウムの内容に基づかない寄稿文である。

論文② **Vladimir D. Kubarev, “Studying the Runic Inscriptions and Petroglyphs of Kalbak-Tash (Republic Altai)”** 「カルバク岩（アルタイ共和国）のルーン銘文と岩画の研究」: 論文①で紹介されたVladimir Kubarev 氏の遺稿。アルタイ共和国オングダイ郡に所在し、新石器時代から古代トルコ時代まで、4000を超える岩絵と20を超えるルーン文字銘文が見つかったカルバク岩について、研究史を整理する。

論文③ **Ryzbek Alimov, “Some Advancements to the Decipherment of the Sign 𐰚 in the Tien Shan Turkic Runic Inscriptions”** 「天山トルコ・ルーン銘文における文字 𐰚 の解読の進展」: 天山地域のタラスやコチコルで見られる「天蓋付き (sign with a canopy)」と呼ばれる文字の音価を考察。γ 説、前舌 r 説、前舌 b 説などを退け、ñ (𐰚) 字を90度傾けた形の字と考えた上で、イエニセイ碑文で ñ やその異体字が nč として読まれる場合があることから、この字の音価も nč であろうとする³。

論文④ **Marcel Erdal, “Did the Old Turkic Writing System have Syllabic Characters?”** 「古代トルコ語の書写システムは音節的性格を有したのか?」: 従来音節文字と見なされてきた uQ や ük, iQ などが母音を伴うのはむしろ特殊な場合であり、通常は子音のみの音価と想定すべきであること、それゆえに tūrük と書かれていても tūrük ではなく türük と読むべきであることなどを述べて、ルーン文字がもともと音節的な書写システムを有していたとする説を否定する。

(3) 本稿におけるルーン文字の翻字・再建は、森安、他 [2009, pp. 7–8] の方式に従う。

論文⑤ Toshio Hayashi, “Illig Qayan or Illik Qayan? A Small Inscription on a Roof Tile” 「イルリグ・カガンか、イルリク・カガンか？屋根瓦上の小銘文」：モンゴル国ホヴスグル県にあるツェツェーフ遺跡から発見された、ルーン文字が刻まれた屋根瓦に対する考察。屋根瓦には ᠶᠡᠶᠡᠯᠢᠯᠢᠭ (i11k / illik) と刻まれており、これを突厥第一可汗国の初代伊利可汗もしくは第6代沙鉢略可汗の名を意味すると考えて、第二可汗国期における祖先祭祀の結果ではないかと推測する。なお、本稿の内容は林 [2005, pp. 80–83] に基づいている。

論文⑥ Gleb V. Kubarev, “A Runic Inscription on a Silver Vessel from the Bratsk Reservoir.” 「ブラツク池発現銀器上のルーン銘文」：イルクーツクで1970年代に発見され、2003年にイルクーツク工業・土木事業研究所によって購入されたルーン文字付きの銀器についての検討。この銀器の形状は古代トルコ時代の埋葬施設から発見されており、特にビルゲ可汗遺跡から発掘されたものとよく似ているため8～9世紀のものとするが、周辺からトルコ系の遺構がほとんど発見されていないため、戦利品として持ち込まれたと推測している。銘文には、これまでС. Г. Кляшторный・Marcel Erdal・大澤孝がいどんだが、いずれも完全な解読にはいたっていないという。

論文⑦ Игорь Л. Кызласов, “Религиозная природа енисейской письменности (Первое приближение)” 「イエニセイ碑文の宗教的性質（概観）」：ルーン文字の文章を総じて宗教的な目的のために作られたものと考え、アルタイ碑銘についても宗教的用途で解釈する。しかし、彼の捉え方に対してNevskaya / Erdalが本書の序文で批判を加えているうえに、Nevskayaは別稿 [Nevskaya 2015] でも銘文の読解が恣意的であることを批判している。

論文⑧ Evgenij P. Matočkin, “Drawings and Runic Inscriptions of the Altai Republic” 「アルタイ共和国の絵画とルーン文字碑銘」

アルタイ共和国にある岩画を伴ったルーン文字銘文について考察し、両者が同時に作成された場合があると指摘する。たとえば、死を悼む銘文と熊狩りの場面が描かれた岩画が隣り合って刻まれていた場合、その死は熊によってもたらされたという具合である。さらには、ルーン文字の存在が岩画にも影響を与え、幾何学的な構成を持つ近代の抽象画の発展の基礎になったのではないかと推測する。

論文⑨ Dmitrij M. Nasilov, “About Certain Grammatical Forms of Runic Inscriptions” 「ルーン銘文のある文法形態について」：前半では、イエニセイ碑文などで「悲嘆」の意味で訳される ärinč という語の語義について、モンゴル高原の突厥碑文の用例も用いて考察し、悲嘆の意味合いはなく、断定的な法性を表す語であると結論付ける。後半では、Мудрак 2009で論じられている属格の +ly が存在するかどうかについて議論を行い、明らかに対格で取るべき箇所を誤解している例などを取り上げて疑問を呈している。

論文⑩ Irina Nevskaya, “Some Orthographic Features of Altai Inscriptions” 「アルタイ碑銘の正書法的諸特徴」：アルタイ地方で用いられるルーン文字の字形と正書法的特徴を考察。後

述するため内容については割愛する。アルタイ地方で用いられるルーン文字の一覧 [pp. 110–111] がある点も価値が高い。

論文⑪ **Fanuza Š. Nurieva, “Old Turkic Runic Monuments of the Volga Area”** 「ヴォルガ地域の古代トルコ・ルーン記念物」：ロシアのヴォルガ地域で発見されているルーン文字銘文の概観。初期ブルガール期（8～10世紀）とブレモンゴルおよびモンゴル時代期（10～13・14世紀⁽⁴⁾）に時代区分をしたうえで、前者の時代の銘文を3点、後者の時代の銘文を4点紹介する。

論文⑫ **Mehmet Ölmez, “Some Specific Features of the Language of Siberian Runic Inscriptions”** 「シベリアのルーン銘文の言語についての明確な諸特徴」：南シベリアのイエニセイ碑文とモンゴル高原の碑文とを比較し、字体の相違、音韻の相違、語彙の相違という3つの観点から論じている。主に、イエニセイ碑文の総体的な年代の新しさを主張している。本稿については後で触れる。

論文⑬ **Takashi Ōsawa, “The Problem and Cultural Background of Runic Mirror Scripts of Old Turkic Epitaphs”** 「古代トルコ語墓碑銘の鏡文字における問題と文化的背景」：ルーン文字史料に時として見られる鏡文字の文章が生じた原因について考察し、鈴木宏節氏がブンブグル碑文研究 [鈴木2010] で主張した、裏返した紙を誤って石に貼り付けて刻文した可能性を退け、鏡文字は無意識に彫られた可能性があるとは主張する。

論文⑭ **Volker Rybatzki / Hu Hong, “The Īrq Bitig, the Book of Divination: New Discoveries Concerning its Structure and Content”** 「イルク・ビティグ、すなわち占書。その構成と内容に関する新発見」：敦煌莫高窟発現の胡蝶装冊子体ルーン文字文書であるイルク・ビティグについて、内容ではなくルーン文字文とその前後に書かれた漢文との関連性を考察する。その結果、冊子にされた時点では漢文は書かれておらず、文章の保護のため、冊子の始めと終わりに付けられた余白に後から漢文が記されたと指摘する。また、ルーン文字文が書かれたのは、先行研究によって930年から942年と指摘されており、莫高窟収蔵の下限が1000年頃なので、本冊子が現在の形になったのは10世紀末であろうとしている。

論文⑮ **Oleg A. Sosedko, “Development of an Electronic Database of Altai Runic Inscriptions”** 「アルタイ・ルーン銘文の電子データベース化の進展」：アルタイ碑銘のインターネット上でのテキスト化作業について、テキスト・写真などのデータを公開するまでの主要な作業を4段階に分けて解説している。データベース作成の技術指南に近い内容である。

論文⑯ **Larisa N. Tybykova, “Characteristic Features of the Old Turkic Epitaphs of Mountainous Altai”** 「山岳アルタイの古代トルコ語墓碑銘における独自の諸特徴」：主にイエニセイ地域の追悼銘文と比較して、アルタイ碑銘の特徴を述べる。アルタイ碑銘は追悼文であるが被葬者の名前しか彫られないなど、極めて簡素な特徴を持つとする。その理由として、ア

⁽⁴⁾ p. 113 では 10～13 世紀とするが、p. 116 では 10～14 世紀としている。

ルタイ地方で追悼文を刻んでいたのは権力を持たない人々だったことを挙げる。

論文⑰ Larisa N. Tybykova / Alexandra T. Tybykova, “Documentation and Research on Old Turkic Runic Inscriptions of the Altai Mountains” 「アルタイ山脈の古代トルコ語銘文に関する情報収集と調査」： 19世紀のアルタイ碑銘の発見以来、現在に至るまでの研究史の整理。論文集という構成を取った以上やむを得ないことではあるかもしれないが、本稿を冒頭に置いた方がアルタイ碑銘についての理解がスムーズだったのではなかろうか。アルタイ碑銘に精通していない読者は、序文の次に本稿を読むべきだろう。

論文⑱ Fahima M. Xisamova, “Participle Forms in Orkhon-Yenisei Texts and in the Tatar Language” 「オルホン・イエニセイの文章とタタール語にある動詞連体形」： 現代のタタール語に見られる動詞を連体形化する接尾辞と、オルホン・イエニセイのそれとを比較し、前者では化石化した場合にしか用いない接尾辞（例えば -duq/-dük）が後者にはあるものの、タタール語で使用されている接尾辞も多く、古代トルコ語が十分洗練された言語であったことを指摘する。

論文⑲ Abdurishid Yakup, “‘Lacuna filling’ in Old Turkic Runiform Inscriptions and Old Uyghur Texts” 「古代トルコ語ルーン文字碑文と古代ウイグル文書における『欠落復元』」

モンゴル高原のルーン文字碑文とタリム盆地発現のウイグル文書において、史料の破損によるテキストの欠落がいかにも復元されてきたか、トニユクク碑文、シネウス碑文などを取り上げて研究史の整理を試みている。森安孝夫氏らのグループ〔森安、他2009〕や鈴木宏節氏〔鈴木2008〕による日本語の最新研究に対する批評も含んでいる。

論文⑳ Peter Zieme, “Eine Runeninschrift aus Kumtura” 「クムトラ発現のルーン文字銘文」： クチャのクムトラ石窟からベルリンに持ち込まれ、紛失して現在は写真のみが残っている窓枠に刻まれたルーン文字銘文の読解を行い、4人の人名を記した落書きであること、そして、1人がサンスクリット語とおぼしき名前を持っていることから、僧侶とその取り巻きの巡礼者一行であろうことを指摘する。

3. 各地のルーン文字の時代考証について

以上に述べたように、本書で扱うテーマは、アルタイ地方の碑銘に関しての研究整理と資料収集事業の報告が一つの柱となっている〔論文①②⑧⑩⑮⑯⑰〕。これらについては、冒頭に既に述べたように日本でこれまでほとんど紹介されてこなかったため、まとまった情報を得ることができるだけで十分貴重である。その一方で、それ以外の論考は中央ユーラシアの諸地域に広がるルーン文字文化全般を対象としており、扱うテーマも歴史学・文法学・文字学・宗教学など多分野にわたっている。これらすべてを細かく紹介し、研究史上の意義を述べることは評者の能力では難しいため、アルタイ・イエニセイ・モンゴル高原という3地域のルーン文字碑銘の時代考証を行った論考を取り上げ、評者の意見を述べてみたい。

本書では、これらの地域に見られるルーン文字の字体の差異に着目するいくつかの論考〔論文④⑩⑫⑬〕が収められており、それぞれがリンクする内容になっていて興味深い。その中で大きな論点となっているのが、イエニセイ地域のルーン文字碑文がモンゴル高原のそれよりも古い時代に書かれたか否かという問題である。この点に関して、Erdal は、論文④〔p. 43〕において、イエニセイ碑文は、一部はモンゴル高原のオルホン碑文のものよりも新しいとはいえ、多くのものはそれよりも古いとする立場を取る。その理由として、オルホンの碑文では、イエニセイにその大部分が存在する、非正統の文字が使われていない、ということを挙げる。たとえば、*ä* と *i* の間の音である *e* を表す文字 (𐰽) や、後舌の *ŋ* を表す文字 (𐰼) などである。これらの非正統の文字は、自然発生的に人びとの間で生まれたものであり、後に突厥第二可汗国の宰相であったトニユク (Tonyuquq, 噸欲谷) が、それらの一部を二次的に受け入れて民族主義的な碑文を建設するのに利用したのだという。

この説には、評者は違和感を覚える。確かに、文字体系を整理して簡略化することはありえるだろう。しかし、そうした簡略化は文字体系が複雑になりすぎた場合に行われるものではなかろうか。ところがルーン文字の場合では、オルホン碑文に見られずイエニセイ碑文に見られる文字は、上述した文字を含めて数文字しかない。そのようなわずかな文字を整理する必要があるか疑問である。そう考えるよりも、モンゴル高原の突厥第二可汗国の段階ではそのような文字が存在せず、イエニセイなどに広まった結果、より精密に言語を表記するための工夫から、それらの文字が新たに創作されたと考えた方が自然ではなかろうか。

すなわち、モンゴル高原のルーン文字よりイエニセイのそれの方が新しいとする捉え方である。本書でも、Ölmezの論文⑫〔pp. 125–126〕が評者と同じ立場を取る。その理由は以下の2点による。

まず1点目として、イエニセイ碑文ではモンゴル高原をはじめ、通常では見られない正書法の変化が見られるという点を挙げる。たとえば、オルホン碑文では *bāngü* (「永遠の」〔Clason 1972, pp. 350–351〕) と書かれる単語がイエニセイでは *bāṅkü* と書かれているといった具合である。Ölmezはこの変化を方言の影響であるとする。そして、こういった変化はあくまで通常の正書法が確立した後に局地的に変化をするのであって、その逆はありえないとする。Clasonの辞書でも採用されている一般的な綴字はオルホン碑文に見られる *bāngü* なので、イエニセイ碑文の方が方言であり、後発であるというわけだ。

続いて2点目として、イエニセイ碑文で使われる単語には、突厥のオルホン碑文には使われていない「新しい」単語が含まれている点を挙げる。たとえば、突厥滅亡後の東ウイグル可汗国時代にならなければ現れないはずのマニ教の神格名、*āzrua* という単語が現れることなどである。さらに、「全ての」という意味の単語もオルホン碑文で使われる *qamay* などは使わず、ウイグル文書に見られる *tözü* が使われている例も挙げている。

これらの反論に対する答えとして、Erdal〔p. 43〕は一部のイエニセイ碑文についてはオル

ホン碑文よりも新しいものである可能性を認めつつも、ほとんどの碑文についてオルホン碑文よりも古いと主張する。イエニセイ碑文の大部分は年代決定を行う材料にとぼしく、それぞれの作成年代に 100 年以上のずれがあったとしてもおかしくはないというわけである。これに対して Ölmez は、古い碑文と新しい碑文の混在という考え方に異議を唱えている [p. 126] が、そう考える根拠を述べておらず、論理的な反論にはなっていない。

このように、そもそもイエニセイ碑文が一時期に集中して製作されたか否かを証明しない限りは、両者の論争によって新旧の結論が出されることはない。しかし、Erdal 自身が挙げる根拠自体が逆にイエニセイ碑文の新しさを示している、という評者の捉え方にもし誤りが無いとすれば、仮に例外はあったにせよ、概してオルホン碑文よりもイエニセイ碑文の方が作成年代は新しいと言えるのではなかろうか。

それでは、アルタイ共和国の碑銘はどうだろうか。Nevskaya の論文⑩では、アルタイ碑銘の字体ならびに正書法研究が行われている。その結果、モンゴル高原のオルホン碑文では使われずイエニセイ碑文で使用される、*e* (*ᠡ*) や後舌の *ᠰ* (*ᠰ*) といった文字が見られること、オルホン碑文で使用される文字についても、字形がオルホン碑文と大きく異なりイエニセイ碑文に近い場合が多いことが指摘された。その一方で、若干ながらオルホン碑文に近い字形 [p. 107, Fig. 5] を持った銘文もアルタイでは発見されているほか、イエニセイにもオルホンにもない字形・文字 [p. 107, Fig. 4] で書かれた未解読の銘文もあるという。このように、アルタイ碑銘はモンゴル高原のオルホン碑文よりもイエニセイ碑文に近い特徴を持っているものがほとんどであるが、例外的にオルホンに近い特徴を持つものも存在しているのである。

つまり、アルタイ碑銘はオルホン・イエニセイ両地域からの影響が見られるということである。両地域から影響を受けているということは、アルタイ碑銘は両者よりも新しい年代に属するということになるだろう。この点について言えば、Tybykova の論文⑪ [p. 180] では、9世紀に東ウイグル可汗国を滅ぼし、多くのイエニセイ碑文の建造者となったとされるキルギズ可汗国の支配を受けた際に、アルタイにルーン文字の利用が導入された可能性が指摘されている。そして、キルギズから持ち込まれた後発の文化であるゆえに、アルタイ碑銘はイエニセイ碑文よりも作成数が少ないのではないかという。

以上を総括すれば、8世紀半ばの突厥第二可汗国の時代にモンゴル高原で碑文が作られるようになった後、ある時期にイエニセイ河流域で碑文の作成が始まって文字の改良が行われ、さらに9世紀半ばに同地でキルギズが支配力を増大してアルタイまで進出したころから、アルタイ碑銘が作成されるようになったと言えるのではないだろうか。

また、アルタイ碑銘に関して言えば、未解読の銘文が存在していることから、別地域からもルーン文字文化が流入した可能性が指摘できよう。可能性として挙げうるのはタラスなどを含む天山地域からの流入である。これら、様々な文化が流入してアルタイ碑銘は成立したと考えうるものであり、やはりその時代は他地域よりも新しく見積もる必要があろう。

以上、雑駁ではあるが本論文集の紹介を終える。本論文集の刊行により、これまでほとんど知られていなかったアルタイ碑銘とその研究が広く世に知らしめられたのではなかろうか。これらの碑銘は、イエニセイ碑文やオルホン碑文との対照によって、ルーン文字の伝播と形態の変化という興味深い問題に新たな光を当てることとなった。これらはアルタイ共和国をはじめ、多くの研究者による努力の賜物である。

最後に、今後の課題を述べてこの紹介を締めくくりたい。本書では、アルタイ碑銘とイエニセイ・オルホンを比較することで一定の成果が生まれた。一方、モンゴル国のルーン文字史料としては、オルホン碑文に代表される突厥・ウイグル時代的大型碑文が比較材料に使われただけであった。しかしながら、モンゴルの広大な草原には多くの落書き銘文が点在しており、これらへの留意も怠ってはならないだろう。これらの銘文はいまだ現地調査の途上であり、まとまった報告書が出されていないため議論の俎上に上がらないが、本書で行われたように字形・正書法・語彙などをイエニセイ・アルタイなどの碑銘と比較することで、新しい発見が生まれる可能性は十分にある。各地の調査によって得られた知見により、ルーン文字文化の解明がさらに進むことを願ってやまない。

参考文献

- 大澤孝 2015: 「南シベリア、サヤン・アルタイ地方の岩絵銘文の調査覚え書き——古代テュルク時代の岩絵年代をめぐる問題を中心に——」『史朋』48, pp. 1-34.
- 鈴木宏節 2008: 「突厥トニユクク碑文簡記——斥候か逃亡者か——」『待兼山論叢』42 (史学編), pp. 55-79.
- 2010: 「新発見のブンググル碑文とモンゴル高原の覇権抗争——カルルクから見た八世紀中葉の北アジア——」『遼金西夏史研究の現在』3, pp. 1-30.
- 林俊雄 2005: 『ユーラシアの石人』東京、雄山閣.
- 森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村健／白玉冬 2009: 「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1-92.
- Clauson, G. 1972: *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.
- Мудрак, О. А. 2009: *Классификация тюркских языков и диалектов с помощью методов глоттохронологии на основе вопросов по морфологии и исторической фонетике*. Москва.
- Nevskaya, I. A. 2015: Old Turkic Runic Inscriptions of Religious Content in the Republic Altai: Myths and Linguistic Evidence. In: E. Ragagnin / J. Wilkens (eds.) *Kutadgu nom bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Bd. 87), Wiesbaden, pp. 323-335.
- Тыбыкова, Л. Н. / Невская, И. А. / Эрдал, М. 2012: *Каталог древнетюркских рунических памятников Горного Алтая*. Горно-Алтайск.

〔付記〕本研究は JSPS 科研費 JP16J04131 による研究成果の一部である。